

☆☆最近の宗教動向☆☆

国内の動向

沖縄戦と慰霊の継承—記憶の現場としての民間巫者の身体 佐藤壮広

1 平和の礎と靖国のあいだ—均質化される戦没者

2001年6月23日午後6時。池袋駅東口広場は、ひとりの男性を待つ市民たちの熱気で満ちていた。その男性の名は小泉純一郎。首相の彼はこの日、「平和の礎」のある沖縄県糸満市の平和祈念公園での沖縄全戦没者追悼式典に出席し、夕刻、東京都議選の応援演説のため池袋に駆けつけた。高い支持率を背景に、首相は沖縄でも拍手や歓声で迎えられた。追悼式典への参列者は、昨年を700人上回る約6000人。首相はその席上で次のように語った。「慰霊の日は8月15日と並び先の大戦の犠牲となった人々の思いに心を致し、世界の恒久平和を願う日本人の心の原点だ」。

沖縄の「慰霊の日」は、沖縄戦で日本軍の組織的戦闘が終わった日であり、沖縄の本土復帰前の1961年に琉球政府が立法化した「住民の祝祭日」である。復帰後の1974年には県の条例で制定され、県や市町村の機関および学校の休日となった。この日の前後、沖縄県内ではさまざまな追悼行事や平和の集いが行われる。いっぽう、周知のように8月15日は「終戦記念日」であり、全国戦没者追悼式をはじめ各地で同様の式典が催される。多くの国会議員らが「英霊」の祀られている靖国神社へ参拝するのも、この日の前後である。

2001年8月13日、以前からの宣言どおりに、小泉首相は靖国神社を参拝した。外交上の配慮から15日を外したとはいえ、参拝の事実は戦死者の「慰霊」を考える上で大きな意味を持つ。なぜならば、「平和の礎」と「靖国」のあいだを繋ぐ行為を、国民の前でしてみせたからである。「平和の礎」は1995年に完成した刻銘碑で、兵士と住民を含む沖縄戦の死者約24万人の名前が刻まれている。敵味方、国籍を問わない刻銘は、世界でも例がない。小泉首相は6月23日にその「平和の礎」の前に立ち、8月13日には「靖国」の鳥居をくぐったのである。

小泉首相の行為は、どのような意味をもつか。それは、戦死者の均質化である。靖国神社には、基本的に日本軍の一員・軍属として戦い「公務死」した人たちが祀られている。

「平和の礎」は、戦闘の場あるいはそれに巻き込まれて亡くなった人“すべて（不明者や刻銘拒否者もある）の名”を刻もうというのがその趣意である。このように、ふたつの慰霊碑は性質が異なる。ところが首相の「平和を願う心」は、軍隊と地上戦に巻き込まれた住民とのあいだを、容易につないでしまう。小泉首相は2001年6月25日の衆院決算委員会で、「平和の礎」と靖国神社の位置付けについて次のように答弁している。「2度と戦争を起こしてはいけない、戦没者に哀悼の誠をささげるという気持ちにおいては共通のものがある」。この答弁の前日には、嘉手納高校の新城俊昭教諭が首相の行動への懸念を表明していた。「平和を希求する沖縄の心は、住民の犠牲から生まれたということをきちんと理解してほしい。靖国神社と同一に考えてもらっては、県民はがっかりする」（琉球新報2002年6月24日朝刊）。

新城氏が用いた「沖縄の心」という言葉。これは、沖縄の歴史や現実およびそこに込められた心情を表す際によく用いられる。しかしこれは、決して沖縄に暮らす人々の総意を示すものではない。現在では、遺族団体の心情もさまざまである。例えば、沖縄県内の遺族の言葉からもそれが分かる。6月23日の追悼式典の折、座喜味和則沖縄県遺族連合会会長が「(首相の)靖国参拝は戦没英霊はもとより、遺族にとってもありがたく、実現を痛切に願う」と述べ、首相の靖国参拝の意向をあと押しした。この言葉のなかでは、靖国神社と「平和の礎」を架橋する理念の遂行者としての首相に、期待が寄せられている。

「平和の礎」の刻銘と「英霊」が同一化される事態は、じつは2年前の2000年にも生じている。当時の森喜朗首相が、沖縄での戦没者追悼式への出席後「英霊のみ霊に哀悼の意をささげた」と発言。この「英霊」発言をめぐり、沖縄県議会で議員と稲嶺知事とのやりとりがなされた。稲嶺沖縄県知事は、首相が追悼式の間では「英霊」発言をしていないと述べ、全戦没者に対する追悼だったと弁護した。以上のように、特にここ2、3年の間に沖縄戦の戦死者の均質化および「英霊」化の動きが度々見られるようになった。

2 戦死者の記憶とその継承—死者のマブイ(魂)を感受する宗教的職能者

国家や自治体が主催する戦没者追悼式典で発せられる「英霊」や「み霊」という言葉。これらは、戦死者を表象する言葉である。しかし、その表象を拒否する遺族らも存在する。靖国神社への合祀反対を主張する遺族や、平和の礎への刻銘を拒否する朝鮮半島出身の人々の遺族たちである。彼らは、個々の死の

個別性と多様性を捨象する表象のあり方に問いを投げかける。子安宣邦は、記念碑や記念館の建立にともなう死者の表象を歴史表象の問題としてとらえ、「集団の歴史的表象化作業に決して収めることのできない、いや、収められることを拒絶する無数の死者たちがいる」と述べている。そして「現代史における歴史表象のあり方を本質的に問うているのはそうした死者たちの記憶である」と、死者たちの記憶の問題と表象のあり方を現代の課題として指摘する(『近代知のアルケオロジー』)。戦死者の記憶の問題は、戦争体験の語り手の減少とともにその体験をいかに継承していくかという、現代の大きな課題であることは間違いない。例えば、参列者の高齢化が進む長崎の平和祈念式典では司会を高校生が行い、広島では児童が平和の誓いを行うなど、歴史の体験・記憶を次世代へ継承しようとする努力が行われている。また広島・長崎・沖縄は、中学・高校生の修学旅行コースになっている。昨年のテロ事件の影響で減少したものの、沖縄へは毎年年間約30万人の修学旅行生が訪れる(訪問生徒数は、沖縄では2001年まで連続14年増加。逆に広島・長崎は1988年あたりから減少し今ではピーク時の6割)。修学旅行生らが訪れる沖縄の戦死者の記憶の現場は、ひめゆり平和祈念館や沖縄平和資料館、「平和の礎」、各地に点在するたくさんの慰霊塔、軍の司令部となった壕、そして住民の避難場所となった「ガマ」(天然の洞穴)などである。ひめゆり平和祈念館では、戦時下に動員されて生き残った女性たちが入館者にじかに体験を語る。また、両館ともに戦争体験者の証言を“展示”している。これは戦争体験者の言葉の力を活かそうとする展示である。戦争体験と戦死者の生は、「あの当時は…」「そ

の時にはね…」その人は、その時そこで弾に撃たれてね…」という過去形で語られる。戦後 56 年という時の流れを考えれば、戦死者の声は聞こえようがなく、生者が過去形で語るそのなかに記憶としてよみがえってくるものである。戦死者が現前するという感覚は、記憶の領域へと運び去られている。また追悼式典に参席した公人たちは、死者に対して「安らかに…」と語りかけるが、死者（の霊）が語ることはない。正確に言えば、語らないことになっている。しかし、戦場となった沖縄本島には、戦死者を感受する人々がいる。それが、「ユタ」と呼ばれる民間の宗教的職能者および霊的感受性をもつ人々たちである。

筆者は、そうした宗教的職能者たちの生活世界を研究しているが、彼女たち（多くは女性）の口からは、戦死者の霊（そのほとんどは、成仏していない霊）の話がたびたび出る。時には、話の最中に職能者が「急に肩が重くなったよ。そういえば旧盆が近いからね」と語り、旧盆近くに“帰って来る戦死者の霊”が、その原因として挙がった（1998 年 9 月、島袋ひろ子さん・女性・48 歳の事例）。職能者たちの身体は、戦死者の霊を感受しているかのようなのである。そして決まって彼女たちは、こうつぶやく。「まだ供養されていない死んだ人のマブイ（魂）が、沖縄にはたくさんあるからね」。

彼女たちが体現する戦死者の表象が戦争体験の証言集に記録されることは、殆どない。浦添市立図書館沖縄学研究室の前津、長間両氏によれば、「戦争体験の聞き取りは、当時の事実の正確な記録を重視するため、報告集にはその話（個人の内面的かつ霊的な体験談）は載らない」という。また、沖縄戦だけでなく、広く戦争体験の記憶と継承が現代的課題

であるとの指摘もあるものの、宗教的職能者らの表象の場が戦死者の記憶のひとつの“現場”として取り上げられることは、稀である。沖縄戦を生き延びてきたある宗教的職能者（女性）は、「シマ（沖縄本島）にはね、遺骨がたくさんあるんですよ。だから私たちの役目もあるんですよ」と語る。戦死者のマブイ（魂）の供養が、彼女の儀礼のひとつなのである。次節では、その職能者の沖縄戦の体験と現在を、戦死者との関わりの一様態として述べる。

3 中里サチさん（女性・那覇市生まれ・73 歳）の沖縄戦と現在（事例 1）

サチさんの現在の住まいは、那覇市首里地区である。多くの民間巫者の人生史にもれず、サチさんも幼少の頃から病弱だったという。また、近所の人々が亡くなるのが前もって分かったという。昭和 20 年、彼女はひめゆり学徒隊で知られる沖縄第一高等女学校に進んだ。しかしすぐに沖縄戦が始まり、6 月初旬には、家族・親戚 13 名と一緒に沖縄本島南部へと避難した。途中、現在の糸満市真壁にある壕に避難していたある夜、その壕が直撃弾を受けた。サチさんは、そのわずか 2 分ほど前に用を足すために壕の外に出ていた。爆裂音のあと、サチさんの父と妹そして祖母は死亡していたという。叔母やいとこらも死亡。6 名だけが残された。ひめゆりの多くの先輩たちも、戦死した。

終戦後、首里高校へ復学したサチさんは、初めてウガン（拝み）を行う。それが、祖母の「魂すくい」だった。沖縄では、死者が出るとその遺骨とともに、死亡した場所から魂もお墓に届けるという儀礼を行う。その儀礼が「魂すくい」である。それゆえ、遺骨が見つからない場合には死者の魂も行き場なくさ

まようと考えられている。戦後、サチさんは記憶をたよりに壕を探し、また不明になった遺骨も探した。ある夜、「おばあちゃん、どこ行っているかね？」とサチさんが実家のカミサマに手を合わせていると、祖母が出てきて「私はここに座っているんだよ」と遺骨が安置されているコザ（現沖縄市）の納骨堂を示したという。そこで母や兄弟姉妹とともに納骨堂へ行き、祖母の遺骨をよりわけて「魂すくい」を行った。父の「魂すくい」もそれから半年後にすることができた。

サチさんが本格的に巫業を始めるのは、結婚して2子を生み育てて間もない1960年ごろからである。それから40年余。現在もなお「戦争で亡くなった人が成仏しないまま、不成仏霊のまま屋敷にころがっているのを、よく見るんですよ」とサチさんは言う。相談者から「魂すくい」を依頼されることが多いが、サチさんはそれを「自分が戦争で死んだ身内の「魂すくい」をきちんとやったから、そのご褒美として、（カミサマから）そういうお力をもらえたと思う」と語る。

サチさんが行う「ヤシチヌウガン（屋敷を清めや屋敷に住む家族の健康祈願の儀礼）」、「ジーチヌウガン（土地の清めの儀礼）」などの祈りの言葉には、必ず50余年前の沖縄戦のことが出てくる。例えば以下は、那覇市首里大名の高台にある墓地での新築の墓の儀礼（1998年11月7日）で、サチさんが語った言葉の一部である。「53年前のイクサユ（戦時期）で爆撃され、ジーチ（土地）荒れいたしました。そしてウヤファーフジ（ご先祖様）の遺骨が崩れた土砂に埋まり、ウシクミ（押し込め）られたままになってしまいました…」。

またサチさんは、自分の相談依頼者の体調不良などの原因に「成仏していない兵隊の霊

の障り」を挙げることもある。1999年4月13日に、サチさんは那覇市識名に住む玉城さんという女性（50代）から相談を受けた。玉城さんは、家の中で居ないはずの人影を見、不眠続きで精神安定剤も服用していると、サチさんに告げた。サチさんは、「屋敷が濁っている」と言い、「兵隊の不成仏霊6名が見えます」と言った。そして、ヤシチヌウガンをしよう指示した。「不成仏霊」と言われると、何やら靈感商法の常套句のように聞こえる。だが、沖縄の歴史的文脈のなかでサチさんら宗教的職能者のそうした言葉を捉えるならば、その判断の場や儀礼が行われる場は、戦死者の記憶の現場として位置づけられるのではなかろうか。

4 慰霊と記憶のかたち—「平和の礎」、慰霊塔、墓

サチさんは、戦没者慰霊の新たな場になりつつある「平和の礎」について、あまり多くを語らない。これまでに、国や沖縄県が行う遺骨収集によって、沖縄県内ではたくさんの遺骨が集められてきた。しかしまだ約5000柱が不明のままである。サチさんは言う。「まだ遺骨がたくさん転がっているんですよ。またね、遺骨だけ拾っても、ちゃんと供養しないとだめなんですよ」。筆者は1999年6月、彼女に「平和の礎」についてどう考えているか尋ねた。サチさんは、言葉を選びながら以下のことを語った。

＜「平和の礎」には、あまり興味がない。偉い人たちが「平和の礎」で手を合わせているが、あれは亡くなった人への供養だとは思われない。心から供養する気持ちがあれば、式典当日だけでなく1週間ぐらい前から、20何万人のひとりひとりに線香やお水をあげて

供養すると思う。県知事も大臣もそういうことはしない。「平和の礎」には名前が刻まれているけれども、名前を刻んだだけでは死んだ人は浮かべられない。また、礎のほかにも沖縄本島内には各市町村の慰霊塔、各字(あざ)や地区の慰霊塔がある。それぞれの家の墓もある。そこまで廻らないと、亡くなった人は供養されない。供養とひとこと言うけれど、沖縄でする供養はそう簡単ではない。>

サチさんが重要だと考えているのは、死者ひとりひとりの供養・慰霊である。その背景には、上で述べたように彼女自身の沖縄戦の体験がある。また霊的感受性がある故に、彼女の身体が個別の戦死者の霊を感受するという事情もある。死者(の霊)を感受するという体験は、おそらく一般化されえない個別の体験である。しかし、死者の個別性に呼応する形で、そうした体験を語る民間巫者たちが沖縄本島には暮らしている。彼女たちの表象行為(霊的体験の語りや死者の供養儀礼)は、これまでの戦争の「記憶」や「記録」の類とは性質が異なる。だがそれらは確かに、ひとつの記憶の表象である。

川村湊は、ひめゆり学徒隊をめぐる幽霊話や「怪談」が沖縄に存在することを挙げ、それが、これまでとは「また別の「戦争」の伝承の仕方の可能性を示しているのではないか」(「沖縄のユウリー」)と指摘する。つまり川村は、戦死者にまつわる霊的な怖い話、不思議な話が、死者たちの「記憶」の継承の現場だと考えているのである。筆者はこの思考を少し広げ、沖縄の民間巫者たちの体験や儀礼の場が、57年前の沖縄戦を経た土地で暮らす人間の、戦争および死者の記憶の場として捉える。個別性に視点を置きつつ、語らない(と考えられている)戦死者の声を“聞く”ひと

の身体表象を理解すること。これが、「平和の礎」で代表されつつある沖縄の慰霊のかたちを問いかけ、同時に、土地に根ざした戦争の記憶の継承という課題につながると考えている。今年の6月23日も、まもなくである…。

注) 事例で紹介した人の名前は仮名。

【主な参考文献】

- 岡 真理 2000 『記憶／物語』岩波書店
川村邦光 1996 『民俗空間の近代-若者・戦争・災厄・他界のフォークロア』状況出版
川村 湊 1996 「沖縄のユウリー」『へるめす』60(1996.1)
子安宣邦 1996 『近代知のアルケオロジー』岩波書店
福地曠昭 2000 『沖縄の幽霊』那覇出版社
大阪大学大学院文学研究科日本学研究室 2002 『日本学報 21』(特集 戦死者のゆくえ)